

第12回夏期福音特別集会(4)(清里)

大饗宴

——マタイ伝第21章33節～22章14節——

1965年8月1日

小池辰雄

聖書の前に降参するまでは 神の民 自己義認と自己突破 招きを断る 飛躍突破 無私無心の世界にあつてこそ 霊盲的な極限状況 聖名のため受けし傷痕もたずして 聖国の大希望 偉大な人生観 御霊の活ける法則 十字架という鍵 天国的現実 羔羊の婚姻

【マタイ21】

33 また一つの譬を聴け、ある家主、葡萄園をつくりて籬をめぐらし、中に酒槽を掘り、櫓を建て、農夫どもに貸して遠く旅立せり。34 果期ちかづきたれば、その果を受けとらんとて僕らを農夫どもの許に遣ししに、35 農夫どもその僕らを執えて一人を打ちたたき、一人をころし、一人を石にて撃てり。36 復ほかの僕らを前よりも多く遣ししに、之をも同じように遇えり。37 「わが子は敬うならん」と言いて、遂にその子を遣ししに、38 農夫ども此の子を見て互に言う「これは世嗣なり、いざ殺して、その嗣業を取らん」39 斯て之をとらえ葡萄園の外に逐い出して殺せり。40 さらば葡萄園の主人きたる時、この農夫どもに何を為さんか』41 かれら言う『その悪人どもを飽くまで滅ぼし、果期におよびて果を納むる他の農夫どもに葡萄園を貸し与うべし』42 イエス言いたもう『聖書に、「造家者らの棄てたる石は、これぞ隅の首石となれる、これ主によりて成れるにて、我らの目には奇しきなり」とあるを汝ら未だ読まぬか。43 この故に汝らに告ぐ、汝らは神の国をとられ、其の果を結ぶ国人は、之を与えらるべし。44 この石の上に倒るる者はくだけ、又この石、人のうえに倒るれば、其の人を微塵とせん』45 祭司長・パリサイ人ら、イエスの譬を聞き、己らを指して語り給えるを悟り、46 イエスを執えんと思えど群衆を恐れたり、群衆かれを預言者とするに因る。

【マタイ22】

1 イエスまた譬をもて答えて言い給う、2 『天国は己が子のために婚筵を設くる王のごとし。3 婚筵に招きおきたる人々を迎えんとて僕どもを遣ししに、来るを肯わず。4 復ほかの僕どもを遣すとて言う「招きたる人々に告げよ、視よ、昼餐は既に備わたり。我が牛も肥えたる畜も屠られて、凡ての物備



わりたれば婚筵に來れと」⁵然るに人々顧みずして、^{あるもの}或者は己が畑に、^{おの}或者は己が商売に往けり。^{あきない}6また他の者は僕どもを執えて、^{とら}辱しめ、かつ殺したれば、^か7王、怒りて軍勢を遣わし、かの兇行者を滅ぼして、^{おこ}其の町を焼きたり。^か8斯て僕どもに言う「婚筵は既に備わりたれど、招きたる者どもは相応しからず。^か9然れば汝ら街に往きて遇うほどの者を婚筵に招け」^あ10僕ども途に出でて善きも悪しきも遇うほどの者をみな集めたれば、^{みち}婚礼の席は客にて満てり。^あ11王、客を見んとて入り来り、一人の礼服を著けぬ者あるを見て、^あ12之に言う「友よ、如何なれば礼服を著けずして此処に入りたるか」^{もた}かれ黙したり。^こ13ここに王、侍者らに言う「その手足を縛りて外の暗黒に投げいだけ、其処にて^{なげ}哀哭・^{はが}切齒することあらん」^な14それ招かるる者は多かれど、^な選ばるる者は少なし」

●聖書の前に降参するまでは

イエスの譬話の最後の段階であります。昨日も、極限状況ということを申しました。どん底という極限のところ人間というものは追い詰められ、あるいは自分で知らないうちにそんなところに入って、そして、突き当たって我にかえるという、ルカ伝15章の放蕩息子の子の譬話の一番どん底のはなしです。これに本当に文句なしに気がつき、

「どうにもならん」

というのが実は我々の現実であるということ、私たちは普段知らないわけです。人間は五十歩百歩で、結局、どうにもならないんです。このどうにもならないということに気がつかないで、そしてそれを他のもので埋め合わせをしているのが一般の人たちの状況なわけです。どうにもならないものをどうにかする道はただこの聖書一卷が与える。全世界に何億の本があろうとも、聖書一卷はまことに本の中の本であり、質がちがう。次元がちがう。これは神の霊の言だからであります。

「その前に降参するまではその世界には入れない。君たち、聖書研究会なんてダメだ。研究そのものは、私だってヘブライ語やギリシア語をやるけれども、そんなことで入れるものではない。人間の生命というのは、人間がどうにもならないものだ。神さまだけがどうかしてくださるものだ」

と、私は学校でも言います。私たちの集会は絶対にお説教ではありません。私は説教なんか絶対しません。私はただ、これに圧倒されて告白するだけです。

そのような世界に私たちは入れられ、人間の側の何の立場も持ちません。ただ、主さまにひっぱり回され、主さまの大なる真理を——人間の側からいかなる表現もゆるさないところの真理——これを証しする。即ち、パウロの言うように、

「お前たちはキリストの書である」



と。我々自身が不立文字となれということです。イエス・キリストは文字をひとつも書きはしない。彼自身が即ち「活字」、活ける文字である。そういった質を本当に私たちが身に体していかなければ、「福音する」ということにならない。そのような気合いをあなた方とこの集会を通して、一つにすることができた。一つになったということは、私自身が本当に皆さんに感謝し、また聖名を讃える次第であります。

青年諸君が特に覚えていただきたいのは、この福音の世界は人間の諸々の学問、科学的いかなる範疇にも入らないということです。聖書を本当に精読身読して、キリストの霊、預言者たちの信仰、使徒たちの信仰と同質的なものに来るまでは左顧右眈することはない。そして、本当にそこに来たら、あなた方は何を讀んでも大丈夫です。この聖書の真理というものは、それを全部、消化することができ驚くべき作用をもっています。何をお読みになっても、決してそれに囚われることがない。それを善用し、またその本当の認識ができる。それまでは左顧右眈してはダメです。もちろん、そうかといって、普段ほかの本を讀むなということではないけれども、精神はそうであっていただきたい。いつも聖書に帰一して、聖書に発し聖書に帰るといふ、この心をもって一切のことにあたることです。

それが本当の「自主」ということなんです。キリストを主とすることが本当の自主ということ。そうすれば、もの凄く深い世界に入り、また素晴らしく高い世界に入る。今度は、限りなき幅ができてくる。非常な幅ができてくる。それが聖書の世界で、人間の世界の一切の善きもの、正しきもの、真理なるものを全部これを包摂することができる。もうそうなたら、仏教のものを讀もうが、回教のものを讀もうが、とにかく、そこに間違ったものがあれば間違ったものがわかるし、善きものがあればそれが認識できる。科学の世界であろうと、何の世界であろうと、みなこの聖書のキリストの光で、白光でもって讀むことです。そこに真理がよるこぼしく発動してまいりますから。真理の喜びというのはそういうことなことであります。では、今日の主題に入ります。

● 神の民

マタイ伝の21章33節から。今日の話の前段階として、ここから読みます。これは「葡萄園の悪農夫」の譬話です。

33 また一つの譬を聴け、ある家主、葡萄園をつくりて籬をめぐらし、中に酒槽を掘り、櫓を建て、農夫どもに貸して遠く旅立せり。

「家主」というのはこの場合おそらく、神さまのことでしょう。「葡萄園」は神の民、神の国。これはイザヤがそのような譬をもつて、イスラエルの民のことを葡萄園と言っています。

「籬をめぐらし」

というのは、もし少し注釈をつけてよろしいならば、「籬」というのはひとつの定めですから、



モーセの律法ということでありましょう。「酒槽」は祭壇、「櫓」はエルサレムの神殿のことであつても構わない。「農夫ども」はユダヤ人のこと。イエスはこのとき、この「農夫ども」において、学者、パリサイ人、祭司、長老というようなものを考えておられたらしい。そういういた者たちに神の民のいろいろな指導を委ねてあつた。ところが、その農夫どもがとんでもない農夫どもであつたというわけです。

34 果期ちかつきたれば、その果を受けとらんとて僕らを農夫どもの許に遣ししに、

「僕ら」というのは預言者のこと。預言者たちを「神の僕」という。イザヤ書に「エホバの僕」という究極の音信おとずれがあります。僕らを農夫どものところに、祭司や教法師のところに遣わした。特にイエスのおられたときの、そのご連中はイエスの対立者ですから。

35 農夫どもその僕らを執とらえて一人を打ちたたき、一人をころし、一人を石にて撃てり。

昔の預言者たちを捕らえた。預言者たちはみな殉教の死をとげたのが多いから。

36 復またほかの僕らを前よりも多く遣ししに、之をも同じあしちように遇えり。

預言者のまた別な群のことでありましょう。ついにこれは洗礼のヨハネまで至る。預言者はことごとく迫害を受けた。「預言者は故里には容れられない」と言われた通りです。

37 「わが子は敬うならん」と言いて、遂にその子を遣ししに、

「わが子」は即ち、イエス・キリストです。遂に時みちて、「言は肉となつて宿つた」というナザレのイエス・キリストです。

38 農夫ども此の子を見て互に言う「これは世嗣よつぎなり、いぎ殺して、その嗣業しぎやうを取らん」

「神の子と自ら言つているところの冒瀆者である。殺してしまおう。あれは本当のメシヤではない」というわけです。

39 斯て之をとらえ葡萄園の外に逐い出して殺せり。

エルサレム城外での十字架の処刑のことをキリストは既に予見しておられるから、こう仰つた。最後のな譬話において、実はそういうことを語っておられるわけです。十字架につけてしまった。

40 さらに葡萄園の主人きたる時、この農夫どもに何を為なさんか』⁴¹かれら言う

『その悪人どもを飽くまで滅ぼし、果期みどりぎにおよびて果を納むる他の農夫ども

に葡萄園を貸し与うべし』

いよいよこれは「神の怒」です。黙示録に出てくる。「他の農夫ども」は本当の使徒的な精神をつぐところのキリスト者です。イエスを信ずる者たち。むしろ異邦人です。「俺は選民だ、エリートだ」と思つて選ばれた者たちはみな脱落した。

「わが民ならざる者に我は、汝はわが神なりと呼ばれる」



と、イザヤ書の終りの方にも出ています。不思議な言葉です。そういうことになってしまおうという。

42 イエス言いたもう『聖書に、「造家者いえつくりらの棄てたる石は、これぞ隅の首石おやいしとなれる、これ主によりて成れるにて、我らの目には奇しきくすなり」とあるを汝ら未だ読まぬか。43 この故に汝らに告ぐ、汝らは神の国をとられ、其の果を結ぶ国人は、之を与えらるべし。

其の果を結ぶ人たちは、キリストの霊をいただいて本当に果を結ぶ者たちは、これを与えられる。それはどこの国びとでも構わない。実質上です。レットルではない。レットル・クリスチャンではない。実質上、本当にキリストの僕です。全世界にたくさんの集会がある。カトリック、プロテスタント、さまざまなものがある。けれども、

「どこに属するからどうだ」

なんてことはひとつもない。

私は「幕屋」ということを言い始めたけれども、決して、幕屋を何ものかと思っはけません。ただ、創世記から黙示録にいたるまで、動的な存在としての幕屋という言葉がある。そして、その構造がいかにパウロが言ったエクレシアを表すと思うから、言うだけの話です。

「幕屋的な何とかでなければならぬ」

なんて、そんなことは思ったことはない。

どこに本当の民がいるかは——「キリスト」の「キ」の字も知らなくても神の民です——神さまはどういう人たちを天界に入れたもうかは、人が誰も人を品定めすることはできない。私はこの真理においては何びとにも絶対にゆずりません。人は人を決して定めることはできない。神さまだけが神の民を知りたもう。キリストの幕屋としてのエクレシアは、その民はどれが本当にエクレシアとして最後に神の国をつぐか、誰も知らん。誰もこれを決定することができない。それだけ厳かなことであります。

●自己義認と自己突破

「その果を結ぶ」

ということ。問題は、

「お前の中に本当に聖霊が宿って、また本当に福音のため、わが名のために生きた

か。また、キリストを知らないけれども、しかし本当に人間として誠を生きただか」

と。要するに、私たちのいかなる判断もゆるさない神さまは、その人その人に対してのつびきならぬ評価をなさっていらつしやるわけで、人間の側からいかなる尺度も当てはめることはできません。いかなる神学もこれを限定することができない。いわゆる「ドグマ」(教理、教義)でも何でもない。そのことは、イエス・キリストが——私が言っているのではな



い——はつきり言つてらつしやる。

44 この石の上に倒るる者はくだけ、又この石、人のうえに倒るれば、其の人を微塵みじんとせん』

この「躓きの石」については、コリント前書10章、詩篇118篇、イザヤ書8章、26章に出ています。ここの「くだけ」とか「微塵とせん」ということはもちろん滅びを意味することです。私たちが昨日から学んでいるところの「砕け」とは違う砕けです。

45 祭司長・パリサイ人ら、イエスの譬をきき、己らを指して語り給えるを悟り、46 イエスを執とらえんと思えど群衆を恐れたり、群衆かれを預言者とするに因る。

キリストはついに十字架の死を遂げて、そして実は世界の本当の大黒柱、本当の礎いしずえとなることをここで預言し、また、福音に逆らういわゆるパリサイ的角度の者に対してはつきりとキリストはものを言われたわけです。そしてまた、

「俺たちは神の民である」

という自己義認者——パウロがパウロと言われたときその筆頭であつたが——その友輩が実はみな逆にキリストを十字架につける者であつた。このこともはつきりとこの譬話の中に出ている。

人間を二つに分類すると、自己を義認する者と、本当に自己を突破して砕ける者と、この二通りです。即ち、言い換えると、イエス・キリストの十字架の贖いの砕けを本当に賜つて砕かれるか、十字架を無視して己が熱心をもつて自己を主張するか。自己を主張する方はサタンのな角度になる。それ自体はどれほどよろしいことであつても、根源的な出発とその方向が違う。質が違つているわけです。

宗教もいろいろな現象があつて、類似現象がいくらでもある。しかし、そのよつてきたるところ、その内実や質、その目的において、はつきりと違つてくる。どうか、宗教現象を比較してどうのこうのなんていうことをすると、福音の世界からはズレますから、そういうことは福音の信仰の実存の世界では問題でないということをはつきり知つていただきたい。

● 招きを断る

その次は王子の婚筵です。これはマタイ伝では22章に、ルカ伝では14章に出ています。多少、記事がちがうけれども、同類のものがここに出ている。まず初めに、ルカ伝14章の方を読みましょう。

「イエス安息日に食事せんとて、或るパリサイ人の頭かしらの家に入り給えば、人々

これを窺うかがう。2 視よ、御前に水腫すいぎをわずらう人いたれば、3 イエス答えて教法

師とパリサイ人とに言いたもう『安息日に人を医いすことは善しや否や』4 か

れら黙然もくねんたり。イエスその人を執とり、医して去らしめ、5 且かつかれらに言い給



う『なんじらの中その子あるいは其の牛、井に陥らん、安息日には直ちに之を引き揚げぬ者あるか』⁶彼等これに対して物言うこと能わず。

全くドグマに囚われているわけです。ユダヤの律法に、「安息日には何もしない」とあるから。キリストはそんな意味におけるドグマなんていうものは破つてしまった。

⁷イエス招かれたる者の、上席をえらぶを見、譬をかたりて言い給う。⁸『なんじ婚筵に招かるるとき、上席に着くな。……¹²また己を招きたる者にも言い給う『なんじ昼餐または夕餐を設くるとき、朋友・兄弟・親族・富める隣人などをよぶな。恐らくは彼らも亦なんじを招きて報をなさん。¹³饗宴を設くる時は、寧ろ貧しき者・不具・跛者・盲人などを招け。¹⁴彼らは報ゆること能わぬ故に、なんじ幸福なるべし。正しき者の復活の時に報いらるるなり』』

という、前段に二つの類似の譬話を言われました。そして、第三番目に、¹⁵同席の者の一人これらの事を聞きてイエスに言う『おおよそ神の国にて食事する者は幸福なり』¹⁶之に言いたもう『或人、盛んなる夕餐を設けて、多くの人を招く。¹⁷夕餐の時いたりて、招きおきたる者の許に僕を遣して「来れ、既に備りたり」と言わしめたるに、¹⁸皆ひとしく辞りはじむ。

始めは「行く」と言つて、今度は「行かない」んです。みんな招かれて、「はい、行きます」と言つていたんだが、「いざ、準備ができたから、来なさい」と言つたら、断りはじめたという。

初の者いう「われ田地を買い、往きて見ざるを得ず。請う、許されんことを」¹⁹他の者いう「われ五くびきの牛を買い、之を験すために往くなり。

請う、許されんことを」²⁰また他の者いう「われ妻を娶れり、此の故に往く

こと能わず」(ルカ14・1～20)

第二義、第三義のことを問題として、私的なことを問題として——それ自体は何も悪いことではないけれども——招きを断る。

「今日はどうも……」

なんて言つて、集會にやつて来ない。それぞれごもつともな理由なんです。けれども、集會にただ無理して来ることがいいのではないけれども、本当にそこで、

「自分にとつてはもうこれは生命がけなことである」

と言つて来る人は恵まれる。

「集會に行かなければ、どうもみんなに悪い」

とか、

「先生に何と思われるか」

とか、そんなことで来たつて、それはダメです。そこで本当に自分で二者選択の、次元の違うものを選ぶか、相対次元でやっていくか、そこでその人の信仰の実存に断層ができて



しまう。いつまでたつても、その飛躍ができない。信仰の世界では——漸進的な次第に進んで行くということは、もちろん日常生活で大事なことです。けれども——時に臨んで躍進しなくてはいかん。時に至りて飛躍せしめられることがある。その時にたじろいではいかん。千載一遇というけれども。その時はもはや

「自己がどうである、環境がどうである」

ということももう振り捨てていかないとダメです。呼ぶ者は神である。人間小池はどうでもいい。私は皆さんとそういう神の言にぶつかるとするために、この集会をやっているんですから。そうでなかったら、私自身がもう即刻にこの集会というものはやってはいけません。

●飛躍突破

ご婦人が子どもを産まれるときに、産みの苦しみという言葉がある。これは本当に苦しいものらしい。とにかく、生命が裂かれる事態ですから。叫びも出ることもあるでしょうし、非常な苦しみをとまなう。肉体の事態においてもそうですが、我々は魂的にも、どうにもならない存在ではないですか。この魂が豁然^{かつぜん}として、ある世界に飛び込むときには、そこには産みの苦しみがある。それはもはや体裁の世界ではない。昨日の祈禱会は正にその意味における産みの苦しみの突破であった。そういう突破の時には本当に投身してかからなければダメなんです。それをとやかくと考えているうちは、その突破はできない。

もう少し卑近な例で言うと、泳ぎの世界で飛び込み台というのがある。飛び込みは、初めはちよつと恐いですよね。恐がつていたら、必ず痛い。何かそこにちよつと恐れがあつて、我慢して飛び込んだつて、それは痛いんです。ところが、本当に身を躍らして飛び込めば、実に爽快なものです。そういうわけで、あの飛び込みの態勢がそうなんです。大海が我を抱くということになる。

泳ぎの世界でも、浮こうと思えば沈む、沈もうと思えば浮く。頭を突つ込まなければ、本当は楽に浮かない。泳ぎながら常に頭を浸しながら進んでいくと、これは楽なんです。

「動中に静あり、静中に動あり」

といって、楽に続いて泳いでいくことができる。頭を上げたままでは、すぐ疲れてしまう。そういうもので、みな任せていくところに、そこに力をいただいて進むことができる。

風の世界でもそうです。燕の飛んでいる世界もみなそうです。風に任せて、そして自分の身を、もう翼までつぼめるような形をしてグーツと飛躍して飛んでいく。そして、その次の段階ではグーツと上昇ができるというようなわけでしょう。

どうか、信仰の世界でもそうだった、ときおり断層を描きながら、飛躍突破してください。だから、私は近頃、「突破」なんてことをさかんに言うんだけれども。これは自分が突破せんとするという意気込みも大事だけれども、もうひとつ大事なことは、その奥に突破せしめる力があるから、この突破させようとしている力に達することが本当の突破になる。



●無私無心の世界にあつてこそ

「自分たちは選ばれた者である。私たちは聖書がわかっている。私たちはクリスチヤンである」

「私たちはユダヤの民で祖先にアブラハムがいて、その伝統を継いでいる者である」

「私たちはカトリックの伝統にある」

「プロテスタントの教会である」

「無教会である」

「幕屋である」

というようなわけで、何かその伝統を誇るような、そこに執るような、そういうことであつたらダメだということです。キリストは、

「アブラハムの子だと自分たちを思うな。この石ころからもアブラハムの子を

起こす」

と言われた。イエス・キリストは、また洗礼のヨハネも、その角度から福音の音信おとずれを始め
ておられる。絶対に非連続であります。ランケは、

「各民族は神に直結する」

と言うが、各人が神に直結している。これはエゼキエル書の言葉ですが、

「悪人の悪はその人に帰し、善人の善はその人に帰する」

というのと同じことだ。

「親がどうだから子がどうである」

「兄貴がどうだから弟がどうである」

なんていうことではない。

「夫がどうであるから妻がどうである」

と、それでもない。本当に各人が神さまに直結している。魂の世界は全くその点で連続をゆるぎないところの、ごまかしのきかない世界です。それでは、どこに繋がりがあるか。本当の繋がりは、聖霊だけが、キリストの御霊みたまだけが、いかなるものも切り離すことができない繋がりを持たせる。

「神の御意みこころを行う者がわが兄弟、姉妹、母である」

とキリストがその角度から言われたわけです。「神の御意を行う者」とは、神の御霊をいただかなければ、御旨みむねを本当に自分の身に体しななければ、御意を行うところに来ませんから。

これはパウロがローマ書7章で、

「ああ、われ悩める人なるかな、この死の体からだより救わん者は誰ぞ」

と言っている叫び、その次に、

「我らの主イエス・キリストによりて神に感謝す」



と言うのは、この力が来たからです。

「この御霊の生命から私たちが何も離すことができない」

と。ということは、イエスの愛が貫流する世界でありますから。これがパウロの絶叫した本当の実存共同体ということです。いわゆる教会という建物ではない。生命的有機体であります。

イエスはいかなる特権的意識をもゆるさない。いかなる人間的な限定や、そういったグループというようなものを、特権にしていることを許さない。イエス・キリストはそういった「俺たちは」というようなご連中、自己義認に対しては徹底的に戦う。

「なんぞ我を善きと言うか。神さまの他に善きものはない。神さまの他に義はない。神さまの他に愛はない」

というのがイエス・キリストの根底的な自覚である。私たちは——真に無であるというのが決して虚無の無ではないと申し上げているとおりに——無私、無心の世界にあつてこそ、本当に個として立たしめられる。それがまた必ず隣人を助けていく。

「隣人とは誰か？」

と言ったときに、

「汝自身が隣人となれ」

とキリストはあのサマリヤ人の譬話で言われた。「隣人とは何か？」と探すのではない。

「お前自身が隣人となつて、いかなる人も隣人だぞ」

ということですよ。

隔てを知らないところの自在な展開、そういった存在をキリストは神の民としてつかもうとなぎっている。みな、第二義、第三義のことにこだわる者は天国の民ではない。「第一義を求めよ」と、

「神の国とその義を求めよ。我とその福音を求めよ」

という、そういう第一義に立つ者だけが、そこを追求して生きる者だけが実は、その他の第二義や第三義や、第何義であろうとも、全部それを救い上げていくところの存在である。そのことを徹底的にこの譬話で言おうとしていらつしやる。

● 霊盲的な極限状況

そこで今度は、マタイ伝22章にいきます。こちらでは王子の婚筵となつていっている。

「イエスマた譬をもて答えて言い給う、²『天国は己が子のために婚筵を設くる王のごとし。³婚筵に招きおきたる人々を迎えんとて僕どもを遣ししに、

来るを肯わず。⁴復ほかの僕どもを遣すとて言う「招きたる人々に告げよ、

視よ、⁵昼餐は既に備わりたり。我が牛も肥えたる畜も屠られて、凡ての物備

わりたれば婚筵に來れと」⁵然るに人々顧みずして、⁶或者は己が畑に、或者



は己が商売に往けり。6 また他の者は僕どもを執えて、辱しめ、かつ殺したれば、7 王、怒りて軍勢を遣わし、かの兇行者を滅ぼして、其の町を焼きたり。8 斯て僕どもに言う「婚筵は既に備わりたれど、招きたる者どもは相応しからず。9 然れば汝ら街に往きて遇うほどの者を婚筵に招け」10 僕ども途に出でて善きも悪しきも遇うほどの者をみな集めれば、婚礼の席は客にて満てり。11 王、客を見んとて入り来り、一人の礼服を着けぬ者あるを見て、12 之に言う「友よ、如何なれば礼服を着けずして此処に入りたるか」かれ黙したり。13 ここに王、侍者らに言う「その手足を縛りて外の暗黒に投げいだせ、其処にて哀哭・切齒することあらん」14 それ招かるる者は多かれど、選ばるる者は少なし」(マタイ22・1～14)

実は、10節から11節のところには段落がありまして、これは繋がらないんです。突然、「礼服」のことなんか出てきて、別の譬話がここへ入ってきた。ちよつと類似しているものだから、一緒になってしまった。そのところはむしろ繋がらないで、

「婚礼の席は客にて満てり」

で終りになるわけですが。まあ、それは学者の判断で正しい。後の方で

「礼服を着けずして云々」

というようなことは恐らく、キリストの味方と思つていたのが実は本当の味方ではなかった。ユダとか或は特に激しいパリサイ的な者のことをキリストはこの譬話で言っているらしいですが、それはまあ別といたしまして。

今、読んだところの内容はルカ伝14章とだいたい類似しております。ただ、マタイ伝22章の方は王の子の婚筵であるというところに少し違つたところがある。この「跛者」「聾」「盲人」だとか、いろいろな「不具者」だとか、それから、

「籬の外の誰でもいいから連れてこい」

と。そうしたら、善きも悪しきもみんなここに満たしたという。ルカ伝とマタイ伝をひっくるめると、そのようなことです。随分、イエスの言葉はしばしば乱暴であります。

「善きも悪しきも」

と、そんなことで清濁でいいのかというわけです。

先程のイザヤ書35章にも、

「聾者は目が見え、聾者は耳が聞こえ、跛者は鹿の如くにとび走り云々」

とありましたが、譬話において言われているところの事態は、何も具体的なそういつた不具者の方々をただ文字通りに言っていることではない。我々自身が実存的に魂の世界でみな、霊盲であったり、聾であったり、跛者であったり、いろいろでございます。我々自身が正にかく言われるに価するところのものである。本当に神の真理が見えてもいなければ、本当に御言が聞こえてもいない。



「聞く耳ある者は聞くべし」

とキリストが言われるが、本当にそのような耳をもっていない。これみな我々自身が聾であり、盲人であるのです。本当に福音のために突っ走っていない。足も不自由なのです。

しかし、自分が霊盲的な極限状況にある。また、霊的に聾であるところの極限状況にあることを本当に自覚して、

「キリストの言に対して聾者なる者を、キリストの真理の現実に対して盲人なる者を、神さま、どうかもつと真理の世界で目を開かせてください、もつと御言を聞かせてください」

と願う。それを深くしていくと、預言とか異言とか、あるいは霊的な幻をヨハネ黙示録のごとくに見せていただくような場合もあります。私はそういう現象を言っているのではないけれども。もし、現象でいうならば、そのような現象も起きてくるというように、根源において霊の目が開け、霊の耳が開けるということを念願しているような、本当に神の真理に飢え渴いている者ということなのです。

「神の真理に飢え渴く者は幸福なるかな。飽くことを得ん」

という。我々は、

「これでいい」

という、

「これで目が開きました、これで耳が聞こえました、これで本当に走れます」

なんていうことはありはしない。限りなく走り、限りなく聞こえ、限りなく目が見えていくことを、いよいよ満たされつつ、いよいよ望んでいく。そういうように、いよいよ私たちはその世界に、これが始まりであると言つて進んでいくわけです。

●聖名のため受けし傷痕もたずして

そういうような具合に、飢え渴き求める。自分のダメさ加減を本当に知って、

「神さま、あなたを」

と言つて主に呼びかかつて、迫りかかつて行く人たち。そういう人たちこそ本当に神の民だということなのです。また、もうひとつの角度から言つと、神の真理のために、愛のために、義のために、福音のために、あるいは目をつぶしたり、あるいは耳が聞こえなくなったり、あるいは片一方の足がなくなってみたり、腕が落つこちたり、というような傷を負っている者たち。これも神の民であります。おそらく、この譬話では、私はその二種類の、二様のものを考えて、受けとつていいのではないかと思います。

昔の無教会の方のある遺稿の中に、

「聖名のため受けし傷痕もたずして御前に出づる恥知るやきみ」

という歌がある。福音のためには戦つて傷ついて完膚なきまでになつていく殉教者たち、



預言者たち、使徒たち。殉教者たちは本当にそのようにして天国へ往った人たちであります。とにかく、何らかの意味において、福音のために艱難かんなんを負わない者は本当に福音しているのではない。私たちはこの福音のために本当に艱難にでつくわすことこそ、

「今のときの苦しみは、われらの上にあらわれんとする栄光に比ぶるに足らず」

と、ローマ書8章にもあつたとおりです。

パウロ自身がそのような選手として、あれだけの傷を全身に受けて、もはや死ぬ一步手前の笞打ちなんかもされて、本当に惨憺たる姿となつたと思います。そのパウロがひとを怨まず、

「敵のため祈れ。責むる者のために祈れ」

と。ローマ書12章というのはキリスト者の最も素晴らしい実存を示すところの言葉です。パウロという人はなんと素晴らしい健全な構造をもつた人だろうと本当に思います。事実、パウロは最大の傷を負い、ついには殉教の死を遂げて、天界に凱歌をあげて往つた。

私たちのこの生涯には福音のためサタンとの戦いが、また、自己との戦い、世との戦い、いろいろな戦いがある。その戦いにおいて、キリストの御力によって、サタンは打ち倒してよろしいでしょうが、けれども、いかなる人をも倒してはいかん。本当の勝利はみなそれをすくい上げる、担い上げるところの事態です。これが聖霊の本当の力強き愛であります。聖霊をいただかなかつたならば、この愛は絶対に出てこない。

「敵を愛する」

ということとは、この愛が来ているからこそ言える。そうでなかつたら、私たちにはキリストの愛があるとは言えないということがはつきり言えるわけです。私たち弱き者が、

「弱きときに本当に強い」

とパウロが言ったのは、そのことであることをしみじみと思います。

● 聖国の大希望

自分が聾であり、盲であり、跛者であり、不具であることを本当に自覚して、飢え渴いている者、また、福音のためにそのような傷を負ってゆく者、これが神の民である。そうでない者は、自分で何か満ち足りているような、この世の第二義、第三義のものをもって非常に立派そうにみえる者はどっこい、というわけであります。

「イエス・キリストが設けたもうところの饗宴にあずかる者は幸いなり」

と言うが、この婚筵に——これは大饗宴であり、また神の

「とらつた 羔の婚姻」

という言葉が黙示録に出てきますが——そのキリストの花嫁としてあずかるエクレシアの会員は誰であるかちつとも知らん。その時にだけわかる。そのエクレシアの会員は、仏教徒もいれば、回教徒もいれば、孔子や老子の教えを受けた者もいれば、いろいろな者がい



ますよ、このキリストの大婚筵にあずかる者は、神さまはレッテルで決して品定めをなさらない。

その大饗宴にあずかるところの大希望をもって、私たちはこの世界の歴史に対してどこまでもこの福音の真理のためには、そのようにして労し、また戦うのであります。最後にそのような偉大な国がくるといふ大希望がなかったら、私は窒息するな。この大希望があるから、私は山のすがすがしい空気よりも、もうひとつすがすがしい靈気を吸わされているわけです。皆さんがそうです。

「^{みくに}聖国を来たらせ給え」

という祈りは、既に我がうちにそのような御靈におけるところの聖国の核が、また私たちの群の中にそういった聖国という事態が来ているからこそ祈れる。

「^{おそ}懼るるなかれ、小さき群よ。汝らに聖国を賜うは父の^{みこころ}御意なり」

とは、

「汝らのうちに既に聖国がある。だから、必ず聖国は来たらせてやるよ」

ということですよ。「聖国を来たらせ給え」という祈りは、既に祈りの中で遂げられて、未来完了が現在完了として既に受けられているところのものがあるからこそ、本当に祈れるわけです。すべての祈りは現実であります。

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

と、キリストは

「^{いま}現在完了で^{しごと}しごと」

と言われる。根源において既にそこに成っているのが、やがて時がいたれば、神さまの御旨に従って成就する。

「この成就は今、汝の胸の中に成就しているだろ。必ず成就するぞ」

というのであります。

●偉大な人生観

どうか、祈りの世界は、キリストの聖国の事態、真理の事態が体現していくことを、祈りの世界で自分で受けとりながら進んでいく。もう何がどうなっても、絶対に行き詰まらない。

「一切の秘訣を得たり」

とパウロが言った。私はこの言葉が大好きなんだ。本当に「一切の秘訣を得たり」という質が、パウロと共に「然り」と、私たちは受けとられる。これは御^{みたま}靈が来なければ、言えませんよ。

私たちは、自己義認は絶対禁物です。真理を主張する。イエス・キリストを主張するんです。福音を主張する。こちら側の何ものでもない。自分たちが何ものかであって、



「俺たちこそは神の国を嗣ぐと思つたら、お前たちはダメだぞ」

とキリストが言われた。私が言っているのではない。イエス・キリストがこう言つてらつしやるんだから。イエス・キリストの最大の敵は自己義認者であつた。これが

「目の中の梁木」^{うつばり}

でした。そして、人を審く。

「汝らのうちの目の梁木を取り除け。さらば、兄弟の目の中のゴミが見えて、

これを取り除くことを得ん」

という。これは愛の行為です。

「お前の中にはこんなゴミがあるぞ」

なんて言つて、指し示しているのではない。

「さあ、取つてやろう」

ということ。「ゴミがあるぞ」というのは、自分の中の梁木がわからないやつが言うことだと。

イエス・キリストは、そういうご連中、ときのパリサイ人、祭司や教法師なんていうのはみんなこれだから、もうどうにもならん。せっかく、弟子たちにそのことを言つても、弟子たちの目はまだ霊盲で耳が聾^{しん}ているから。

「お前たちはまだ、聞けども聞こえないんだ。私が十字架を通つて天界に行つたら、

私が言つたりしたりしたことが本当にお前たちはわかるぞ。御霊が、慰めの霊、

真理の霊が来たら、お前たちはわかるぞ」

と。そのことに託して、キリストは天界に行かれた。その通りになつた。ペンテコステのあの祈りのあげくに来たところの、嵐の如き火のごとき臨みによつて、キリストの国、神の国の民がそこから生じたのであります。

「私たちは質的にどこまでも使徒的な信仰でなければダメだ」

と私が言うのは、そのわけです。私が言うのではない。私を通して言わしめている何ものかの声です。

このような大饗宴にあずかるありがたいお招きを受けて、自分のダメなことを自認しながら、ただキリストに飢え渴くときに、その目は素晴らしい目とされ、その耳は素晴らしい耳とされ、その足は素晴らしい足とされ、その手は素晴らしい手とされ、為すこと思うことはすべて神の栄光の現れと、現にされていくんです。現にされていく。そして、神の国が来たときに、神の国においてみなそれぞれの役割を果たして、天国の前進がなるわけですよ。こんな偉大な人生観、世界観、歴史観というものが聖書の他にどこにあるかという。そのような神さまの真理を私たちはいただいて、じつとしていられないわけですね。

●御霊の活ける法則

どうか、皆さん、この絶対無条件の福音の世界は、学問も何もそんな条件はいらん。皆



さん一人びとりにその人でなければならぬ、のつぴきならぬところの事態がこの聖霊の世界に、キリストの御霊の世界に、その愛の世界に、その智慧の世界に入ったら、行くんだから。どうか、自由自在に動かされてください。

「こうでなければならぬ」

なんて、そんな決まった法則なんかありません。そのようにして動くことが、

「いのちの御霊の法」

とパウロがローマ書8章2節で言っているところの世界です。

私がドイツ語の講演をしたときに、終りの方で、

「御霊の活ける法がわがうちに」

これはカントの有名な言葉を学んで書いたわけです。

そしてまた私を通して、キリストの一切を包摂するところの愛」

と書きました。これが我々の存在の本質である。本然の姿で、キリストの御姿の成るところの事態であると思います。カントが、

「これを思えば思ふほど、畏敬の念を持ち、また驚嘆する。それは我がうちの道德の法

とわが頭上の星の空」

と言って、自然界の一切の法則、宇宙の法則——すべて、法則を本当に見、かつまたこれを身に体していく世界が本当の自由です——その法則は単なる法則ではない。生命の活ける法則なんです。御霊の活ける法則なんです。だから、することな無軌道が本当の軌道なんです。空に軌道がありますか、空は無軌道の世界です。無軌道の世界を鳥にしろ、飛行機にしろ、自由自在に飛べるでしょ。地上はどうも路があつて窮屈だよな、ドグマ(教義・教理)があるから。本当の世界は無ドグマの世界です。

「わが無教会」

という言葉は、福音の本当の精神をあの逆説的な、ちょっと反語的な言葉で表している素晴らしい内村先生の自然に生じた言葉、歴史的な言葉なだけけれども。ただ言葉に執いたら、もちろんいけません。

イエス・キリスト自身が無神殿であつた。

「こんな大きな神殿にお前たちは驚くか。こんなものは壊してしまつて、三日で建てるぞ」

と。これはイエスの乱暴な言葉ですよ。

「四六年もかかつて建てたものをあなたは三日で建てるか」

てなわけです。わからないんだ。イエス・キリストが活ける神殿であるということですよ。

「汝らは活ける神の神殿である」

とパウロも言いました。いわゆる神殿宗教になったらダメだということですよ。

「神殿、神殿、神殿と言うな」



と、預言者エレミヤが言った。いや、本当の生きた姿に一人ひとりになって、活ける天衣無縫という——我々の身体は天衣無縫です、どこに縫いあところがあるか、縫いあとは一つもない。どんな裁縫師も人間の皮膚のようなものは作るわけにいかない——天衣無縫的な事態に実は素晴らしい有機体的な姿がある。福音の真理は何とまあこれは、もう以心伝心、以霊伝霊というような事態であります。

●十字架という鍵

それでは、最後の饗宴のことを、黙示録にちよつと触れましょう。ヨハネ黙示録の5章を開きます。巻物があつたが、七つの封印で封ぜられて、誰もどうにも開く人がいないので、非常に悲しんでいたら、長老の一人が、

「⁵長老の一人われに言う『泣くな、視よ、ユダの族の獅子・ダビデの萌蘖、
すでに勝を得て巻物とその七つの封印とを開き得るなり。』

素晴らしい幻ですね。

6 我また御座および四つの活物と長老たちとの間に、屠られたるが如き羔羊
の立てるを見たり、之に七つの角と七つの目とあり、この目は全世界に遣
れたる神の七つの霊なり」(ヨハネ黙示録5:5-6)

十字架の主を見たということです。この十字架の主だけが十字架という鍵をもっている。聖書を開く鍵は、十字架という形をしている——形ではない——十字架なんだ。十字架でなければ、これは開けない。聖書の鍵は十字形になっているから、十字架でなければ、これは開けない。キリストの十字架の前に降参して、本当にこれに全身を明け渡すまでは、この聖書の文字は、読めどもわからず、聞けども聞こえない。

「聞こえざらんがために福音を伝えている」

という、非常に逆説的な言葉がイザヤ書の中にある。それは、

「読めば読むほどわからないよ。手放して読んでごらん、いくら註解書で読んでも、
いくら研究したつてわからないよ」

ということをやが言っている。ここは、ある一つの一点に、ある一つの光によらなければ、ある一つの鍵によらなければ、この世界は開示してこない。哲学をいくら研究しても、文学をいくら読んでも、科学をいくらやつても、聖書はわからない。

それから、たくさんの封印が開かれていく。黙示録6章9節のところ、

「⁹第五の封印を解き給いたれば、曾つて神の言のため、又その立てし証のた
めに殺されし者の靈魂の祭壇の下に在るを見たり。¹⁰彼ら大声に呼わりて言
う『聖にして真なる主よ、何時まで審かずに地に住む者に我らの血の復讐
をなし給わぬか』

「アベルの血よりゼカリヤの血に至るまで」とキリストが言われた。そして、それどころで



はない。イエス・キリスト自らの血が最も血のうちの血であります。

11 ここにおのおの白き衣を与えられ、かつ己等のごとく殺されんとする同じ僕たる者と

即ち、福音のために苦難を通つていく僕たちと、

兄弟との数の満つるまで、なお暫く安んじて待つべきを言聞けられたり。」(黙示録6・9～11)

神の国が来るまでに、私たちは福音のために何らかの傷を負つて、次の世界に行かなければいかん。

●天国的現実

それから、7章の終りの方にいきまして、これは聖書の最も輝かしいところの一つの箇所です。たくさんやからの族がいたけれども、9節から、

「9 この後われ見しに、視よ、もろもろの国・族・民・国語の中より、誰も数えつくすこと能わぬ大なる群衆、しろき衣を纏まといて

「十字架の血によつて贖あわれたもの」と、また後の方に出できます。

手に棕櫚しゆろの葉をもち、御座みくらと羔羊こひつじとの前に立ち、¹⁰ 大声に呼ばわりて言う『救は御座みくらに坐したもう我らの神と羔羊こひつじとにこそ在れ』¹¹ 御使みつかいみな御座および長老たちと四つの活物いきものとの周囲まわりに立ち、御座の前に平伏し神を拝して言う、¹² 『アアメン、讚美・栄光・智慧・感謝・尊貴・能力・勢威、世々限りなく我らの神にあれ、アアメン』¹³ 長老たちの一人われに向いて言う『この白き衣きを著きたるは如何なる者にして何処より来りしか』¹⁴ 我わがいう『わが主よ、なんじ知れり』かれ言う『かれらは大なる患難なやみより出できたり、羔羊の血に己が衣を洗あらいで白くしたる者なり。

キリストの十字架の贖あいを受けて白く、存在が本当に罪なきものとされている者である。

¹⁵ この故に神の御座みくらの前にありて昼も夜もその聖所せいじよにて神に事つかう。御座に坐したもう者は彼らの上に幕屋を張り給うべし。¹⁶ 彼らは重ねて飢えず、重ねて渴かわかず、日も熱も彼らを侵おかすことなし。¹⁷ 御座の前にいます羔羊こひつじは、彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を拭ぬぐい給うべければなり』(黙示録7・9～17)

もう、言葉がないです、こういうところを読むと。そのような天国の、

「緑の牧場、憩やすいの水汀みぎわ」

と詩篇23篇に歌われているような天国的現実に案内されるところの神の民は、福音のため、キリストの義のため、愛のため苦し傷つき、また本当に飢え渴かわいて、

「自分は何ものでもない。こんなダメなものでございます。しかし、あなたを」



と言って、追求する者たち。こういった人たちが神の民である。
 私たちはその意味において、神の偉大な大饗宴にあずかるべく、これからの実存を本当に投げかけて、この福音的実存を福音しながら行きたいと本当に思います。

● 羔羊の婚姻

そして、19章のところに、

『⁵また御座より声出でて言う『すべて神の僕たるもの、神を畏る者よ、小なるも大なるも、我らの神を讃め奉れ』⁶われ大なる群衆の声おおくの水の音のごとく、烈しき雷霆の声の如きものを聞けり。曰く『ハレルヤ、全能の主、われらの神は統治すなり、⁷われら喜び樂しみて之に栄光を帰し奉らん。それは羔羊の婚姻の期いたり、既にその新婦みずから準備したればなり。⁸彼は輝ける潔き細布を著ることを許されたり、此の細布は聖徒たちの正しき行為なり』⁹御使また我に言う『なんじ書き記せ、羔羊の婚姻の宴席に招かれたる者は幸福なり』と。』

この「羔羊の婚姻」という言葉を表題として、藤井武先生が心血を注いで、あの大詩篇を書いた。未完成に終わった。しかし、あの最後のところに——もう絶筆ですよ——「いやはてに、第三の災いが地に臨むだろう。その時は哀哭・切齒することあらん」

という言葉でもって終わっている。もし、この二十世紀に第三の災いが来たらば——何か私は、この恐ろしい藤井先生の絶筆が、あるひとつの警告を発しているように思います。

また我に言う『これ神の真の言なり』¹⁰我その足下に平伏して拝せんとしたれば、彼われに言う『慎みて然すな、我は汝およびイエスの証を保つ汝の兄弟とともに僕たるなり。なんじ神を拜せよ、イエスの証は即ち預言の霊なり』』

(黙示録19・5～10)

このような羔羊の婚姻に招かれて、新天新地がそこに到来する。黙示録21章にいきますと、「我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、

海も亦なきなり」

と。前の天と地とは過ぎ去り、私たちにとつても過去は既に過ぎ去り——過ぎ去ったということはただ過去が空しかったということではない——過去のプラスもマイナスも全部、本当のプラスに、十字架が表すようなプラスに私たちが変えられる。もう言葉に表せない。感謝と讚美のほかはない。

『²我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる新婦のごとく準備して、神の許をいで、天より降るを見たり。³また大なる声の御座より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みずから人と偕に在して、⁴かれらの目の涙をことごとく』



とく拭い去り給わん、今よりのち死もなく、
かなしみ悲歎も、さけび号叫も、くるしみ苦痛もなかる
 べし。前のものに過ぎ去りたればなり』

人間の世界にはいかに悲嘆が多いか。多くの涙、多くの血が叫んでいる。それが今、私たちのこの瞬間に、どこに悲惨の涙が流されているか、どこに血の叫びがあるか。どこかであるんです。この地上は惨憺たる地上であります。それが全部、贖われる。

「悲しむ者はさいわいなり」

とキリストが言われたのは、その角度からであります。けれども、本当の悲しみを担ったキリストは本当の歓喜を私たちに与えてくださる。私たちのいかなることも、イエス・キリストは全部思いやりたもう。イエス・キリストだけが、本当の「ミットライデン」「共に悩む」ことのできるひとであります。そして、このイエス・キリストの「ミットライデン」は「ミットフロイデン」の、本当に「共に歓ぶ」世界へと連れて行つてくださるわけであります。黙示録の凱歌はそのような艱難を通しての凱歌である。

ベートーヴェンも

「ドウルツヒ ライデン フロイデ」(患難を通して歓喜へ)

と言った。聾になつて、音楽家には致命傷です。けれども、あの聾になつてからのベートーヴェンの作曲が神品である。それはベートーヴェンは本当に神の靈に触れて、

「私は自分のためではなく、人のために、人の慰めのため喜びのために作曲するのだ」

と。

「幾百万の人たちよ、相い抱いだけ。この愛情を全世界に及ぼせ。星の幕屋のかなたには愛

の父ぞ住みたまもつ」

という。私はシラーの言葉で一番好きな言葉です。あのシラーの詩をベートーヴェンが「第九シンフォニー」の終りにもつてきて歌っている。さすがに、いいところを捕まえてくれた。ベートーヴェン、シラーの心を本当にこころとして歌っているか。

それならば、全世界は本当に隣人です。中共であろうとソ連であろうと何であろうと、私たちは人間であるならば、一切のイデオロギーを超えて、愛の握手ができるはずです。私たちは全て、全世界の人はひとであります。本当の人のうちのひとになる。それはイデオロギーではない。最後は本当にそのハート、キリストの心を心とするときに——イエス・キリストは一切を包摂するというのはその愛の力である——霊的な愛の、魂の全存在の愛です。

